

高岡修句集『水の蝶』 五十句抄

郷愁へ大きく曲がる春の川

女体なら海市のひとつとして抱く

月光の立棺として摩天楼

父はまだ昨日の空を鋤きやまぬ

蝶わたりゆきあおおと野を躰す

春愁とたわむれている指も水

かたつむり虚無に半身いれている

虹の腑の闇を見ている鳥一羽

殺意なら森商店の裏にある

方舟に乗りはぐれては狩る螢

アンモナイト死は円心にしてけぶる

溺れたる空眼にとどめ夕チアオイ

空蟬が想像している百の雷

空蟬の背にも銀河の流れこむ

質量を少し離れて秋の蝶

澄みゆくは哀しからずや秋の水

捨てるべき背中と思う芒原

天地を宥あめつちゆるさず廻る独楽ひとつ

死するまで研を使う冬木立

天心の乱心見たる 風いかのほり

飾るならカフカの闇へ黄水仙

夢みざる眼なら抉る雪の果て

寝返ればシートに絡む冬銀河

美しき溺死もあらむ水中花

蚊帳を出て世界の果てへ出てしまふ

肉のかけ恋うかに揺れる蛇の衣

次の世も系譜はひとつ蛇の衣

鳶のからむ夕空も切り花鋏

虹の屍しは石棺に容れ横たえる

月光のサララップでつつむ森

草ひばり天上に響なる施錠音

踏切りを渡れるは地震／春の死者

溺死せざるものにはあらず陽炎も

死者のあうら白き炎として並ぶ

春雷と家霊をいれて棺一基

その樹液熱きか内部被曝の木

海の底を歩いては咲く夕ざくら

失踪もまたみずみずし雪解音

海底のピアノノ連弾して果てる

鳥雲を出て鳥にある死のほてり

紙風船打ち天上の渚恋う

おぼろ夜も水の鎖につながれて

死者の胸の春愁を翔つ水の蝶

被曝せる木が朝焼けで洗う髪

筆立てに一絶壁を挿して秋

本の背に山霧流し読みふける

月光が編みゆく檻にみな睡り

麦の秋かく眩まばゆきか転生は

墜落の高さを飛翔と呼べり鷹

沖に湧く手毬唄なら毬をつく